

1760年代から1830年までのヴィーンにおける オペラ上演についての試論

— ドレスデン・ベルリンとの比較から —⁽¹⁾

大河内 文 恵

はじめに

汎欧的に国民国家形成の動きが活発化し、市民社会へと大きく舵を切った1830年よりも前の時期のドイツ諸都市において、宮廷文化からの移行はオペラ上演にどのように表出していたのか。それを上演記録の言語の変化から読み解くのが、本稿の目指すところである。

女帝マリア・テレジアの治世（1740～1780年）および、啓蒙専制君主ヨーゼフ2世がオーストリアをおさめた1780～90年とその前後の時代のヴィーンではどのようなオペラが上演されていたのだろうか。18世紀にヨーロッパを巡り音楽旅行記を書いたバーニーによれば、彼が1772年にヴィーンで最初に観たのは予定していた「イタリア語の小喜劇」ではなく「ドイツ語の悲劇」だった。そして2日目には「ドイツ語喜劇」を鑑賞し、その後メタスタジオ、ハッセ、グルックに会ったことを自慢している⁽²⁾。

18世紀後半から19世紀前半のヴィーンにおけるオペラ上演に関する研究は、従来、モーツァルト研究の歩みとともにあった。それらは、モーツァルトのオペラの多くが上演されたヴィーンの劇場という文脈を通して、モーツァルトのオペラの位置付けをおこなうためのものであり、当然のことながら、モーツァルトのオペラの上演がおこなわれた年代に限定されたものが多い⁽³⁾。

ヴィーンの宮廷詩人にして台本作家であったメタスタジオによるイタリア・オペラや、当時ヴィーンで流行していたドイツ語のジングシュピールといったオペラ演目が実際にはどのくらいの割合で、どの程度上演されていたのかを知ることは、バーニーにも言及されているサリエリやグルックなどヴィーンで活躍した作曲家のみならず、他の国や都市からヴィーンへやってきたオペラ演目を知る上でも有用であろう。

1. マリア・テレジア時代のオペラ上演

1740年10月20日のカール6世崩御の後、ハプスブルク君主国は、マリア・テレジアを後継として認めない周辺諸国（フランス、スペイン、バイエルン、プロイセン、ザクセン）から侵攻され、8年にもおよぶオーストリア継承戦争を戦い抜き、シレジアを失ったものの領土の大半と帝位の保持に成功した⁽⁴⁾。諸外国からの脅威や戦費による疲弊がありつつも、マリア・テレジアはヴィーンの諸劇場の支配人であったヨーゼフ・ゼリアースを主たる出資者として、王宮に隣接していた古いテニスコート（現在のような屋外のコートではなく、室内にあった）を劇場に改築した。それがブルク劇場の始まりである⁽⁵⁾。

ブルク劇場が公式に宮廷劇場として最初に使用されたのは、1744年1月8日に、マリア・テレジアの妹であるマリア・アンナとフランツ・シュテファン（マリア・テレジアの夫）の弟カール・アレクサンダーとの結婚の際の、《イベルメストラ》（メタスタジオ台本、ハッセ作曲）上演である。その後は、1746年10月15日にヴァーゲンザイル作曲の《ティート帝の慈悲》が上演されたのみで、本格的なブルク劇場使用はオーストリア継承戦争が終結した1748年以降となる。再開の柿落とし公演は、1748年5月14日のグルック作曲《見いだされたセミラーミデ》であった。グルックは1752年にウィーンに移住し、宮廷楽長となるが、1748年の時点ではまだミンゴッティの移動オペラ団の座付き作曲家であった。

当時のウィーンにはブルク劇場以外にも劇場が存在し、特に1709年にできたケルトナートーア劇場は1752年まで特権的に使用されていた。1752年、マリア・テレジアは低俗な娯楽を制限するために、宗教上の祝祭日とその前後、および毎金曜日の劇の上演を禁じる措置をおこなった⁽⁶⁾。この時期、ブルク劇場はフランス劇場、ケルトナートーア劇場はドイツ劇場と呼ばれ、前者ではイタリア・オペラとフランス・オペラ、後者ではドイツ語による即興喜劇が上演されていた。1754年にドゥラッツォ伯が劇場総監督官になると、フランス・オペラとイタリア・オペラの融合を目論む彼はグルックをブルク劇場の音楽監督にしてオペラ・コミックを上演させた⁽⁷⁾。また、1759年秋にはパリで同地の劇場支配人のファヴァールと情報交換をおこない、その後劇場情報、レパートリーや人的資源がパリから届くようになり、一層のフランス化が進むこととなった。

2. 上演調査

ウィーンの上演調査をするにあたり、2000年からボン大学で行われ、2018年8月からマインツのゲーテンベルク大学のサイトで公開されている、イタリアとドイツのオペラ調査のデータベース⁽⁸⁾を利用した。「1770～1830年のイタリアとドイツ・オペラ Die Oper in Italien und Deutschland zwischen 1770 und 1830」と題するこのデータベースは、1800年前後のドイツにおけるイタリア・オペラとフランス・オペラを受容と影響に重点が置かれ、19世紀になってドイツの独自性がどのように獲得されたかを探究することを目的としており、ウィーン・ドレスデン・ベルリン・ミュンヘン・ワイマールでのオペラ上演が収録されている。オペラのタイトルや台本作家、作曲家で検索できるのはもちろん、初演地や再演がおこなわれた上演地も検索条件にすることができる。

このデータベースは1770年以降を対象としているため、1760～69年についてはイタリア・オペラのデータベース Corago⁽⁹⁾ および、バウアーの上演記録⁽¹⁰⁾ からデータを抽出した。

3. ウィーンの上演

1760年から1830年の各年におけるオペラの本数を言語別のグラフで示したのが表1である⁽¹¹⁾。

全体の傾向として、当初優勢だったイタリア語のオペラが急速に減少し、それに代わってドイツ語のオペラが増加し、全体に占める割合も大きくなる。それと同時に目立つのはフランス語オペラの少ないながらも常に存在しつつ、大きなウエートを占める年もあらわれることである。これらの傾向をウィーンの上演政策の推移とともに考えたい。

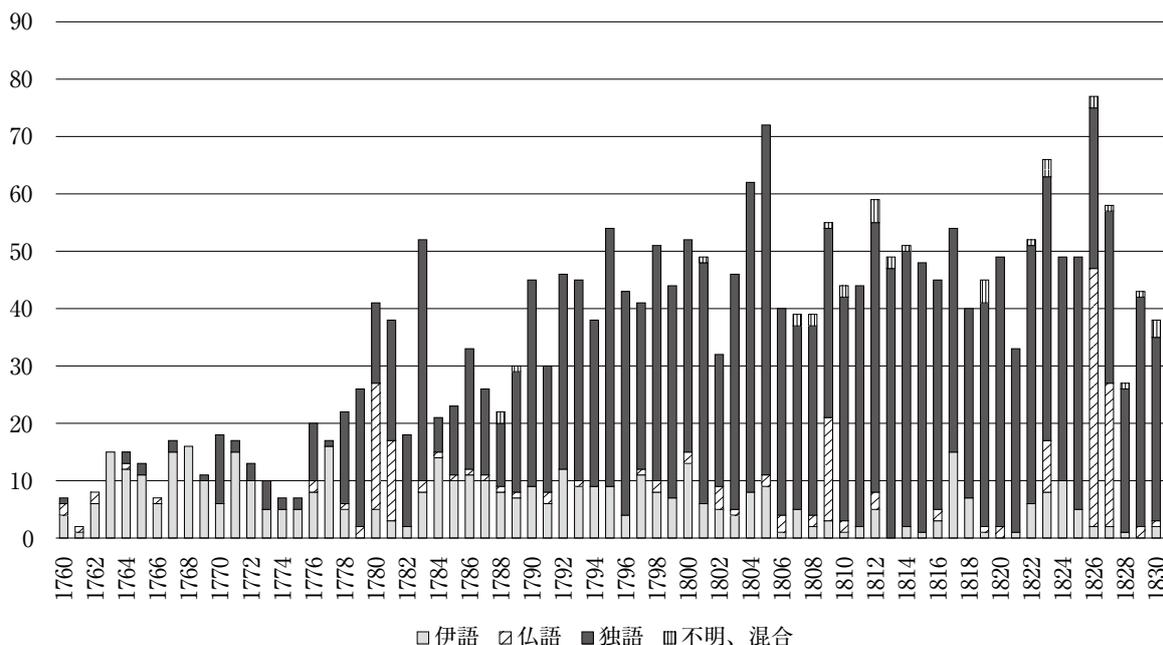


図1 ヴィーンのエペラ上演数 (1760~1830)

1760年にヨーゼフ2世がパルマ公女のマリア・イザベラと結婚し、1761年1月3日にイザベラの誕生日を祝うためにドゥラッツォ台本、トラエッタ作曲《アルミーダ》がブルク劇場で上演された⁽¹²⁾。1764年、ドゥラッツォが解雇され、1765年8月にフランツ・シュテファンが亡くなると状況が変わってくる。フランツ・シュテファンから神聖ローマ皇帝の称号を受け継いだヨーゼフ2世は、プロイセンのフリードリヒ2世を敬愛し、啓蒙主義に傾倒していた。

大きく情勢が変わったのは、1776年である。ヨーゼフ2世はケルトナートーア劇場を解散させ、ブルク劇場を「国民劇場」と改称させた。それまでイタリア・オペラを上演していたブルク劇場ではドイツ語演劇の劇団とブルク劇場付のオーケストラが残され、1778年にはドイツ語オペラ上演のためのオペラ団が結成された。

1778年2月、ウムラウフ作曲のジングシュピール《鋌夫》でドイツ・オペラ団はデビューした⁽¹³⁾。ドイツ語オペラのレベルに満足できなかったヨーゼフ2世は国民ジングシュピールの試みを1783年には中断させ、ブルク劇場でもイタリア・オペラが上演されるようになったと言われているが、実際にはそれ以外にもわずかながらイタリア・オペラも上演されている。

1783年に国民ジングシュピールを中断させる代わりに設立したのが、オペラ・ブッフア団であった。以下に1783年にブルク劇場で上演されたイタリア・オペラの一覧を記す。

表1 1783年ブルク劇場の上演演目

年	タイトル	上演言語	作曲家
1783.5.5 - 1787.1.5	L'Italiana in Londra (UA)	ita	Cimarosa, Domenico
1783.5.28	Fra i due litiganti il terzo gode (UA)	ita	Sarti, Giuseppe
1783.7.25 - 1783.10.31	Il Falegname (UA)	ita	Cimarosa, Domenico
1783.10.8 - 1783.11.10	I filosofi immaginari (UA)	ita	Paisiello, Giovanni
1783.11.14 - 1784.1.7	La finta principessa (UA)	ita	Alessandri, Felice
1783.12.29 - 1785.9.9	I viaggiatori felici (UA)	ita	Anfossi, Pasquale

UA：初演 / ita：イタリア語

チマローザ、サルティ、パイジェット、アレッサンドリ、アンフォッシとイタリア・オペラの人気作曲家の名前が並んでおり、ここにウィーンのイタリア・オペラの中心人物として語られるサリエリやモーツァルトの名前はない。もちろん、サリエリがこの時期にいなかったわけではなく、1783年に上演されたサリエリのオペラがドイツ語のオペラだったからである。モーツァルトは1782年に《後宮からの誘拐》をブルク劇場で初演、その次は1786年の《劇場支配人》《フィガロの結婚》となる。サリエリに関しては、ほぼ毎年新作上演がおこなわれたが、モーツァルト作品の上演は数年おきにおこなわれた。

1788年からカペルマイスターとなったサリエリは、1790年ヨーゼフ2世が亡くなると、次のレオポルド2世のもとで、毎年新作オペラを書くことを条件にオペラのリハーサルや日常の雑用を弟子のヴァイグルに委譲した。新作のオペラを上演したのは1804年が最後で、そこからの20年は劇場や宮廷の音楽関係の運営面に力を注ぎ、後進の育成につとめ、亡くなる前年の1824年までその地位にあった。

4. ドレスデン、ベルリンとの比較

同時期のドレスデンでの上演数の推移を見てみよう。

ドレスデンでは、1756年から始まった七年戦争が1763年に終了した後も財政を立て直すためにオペラの上演はせず、1765年からようやく再開された。ウィーンと比べると、最も大きな相違は、年間の上演作品数である。左側の目盛りに注目すると、ウィーンでは平均40~50作品で推移し、多い年には80近くなるのに対し、ドレスデンでは多くても25、平均10前後で推移している。言語の内訳としては、ドレスデンではイタリア・オペラが継続的に上演され続けており、その伝統の根強さが見て取れる。

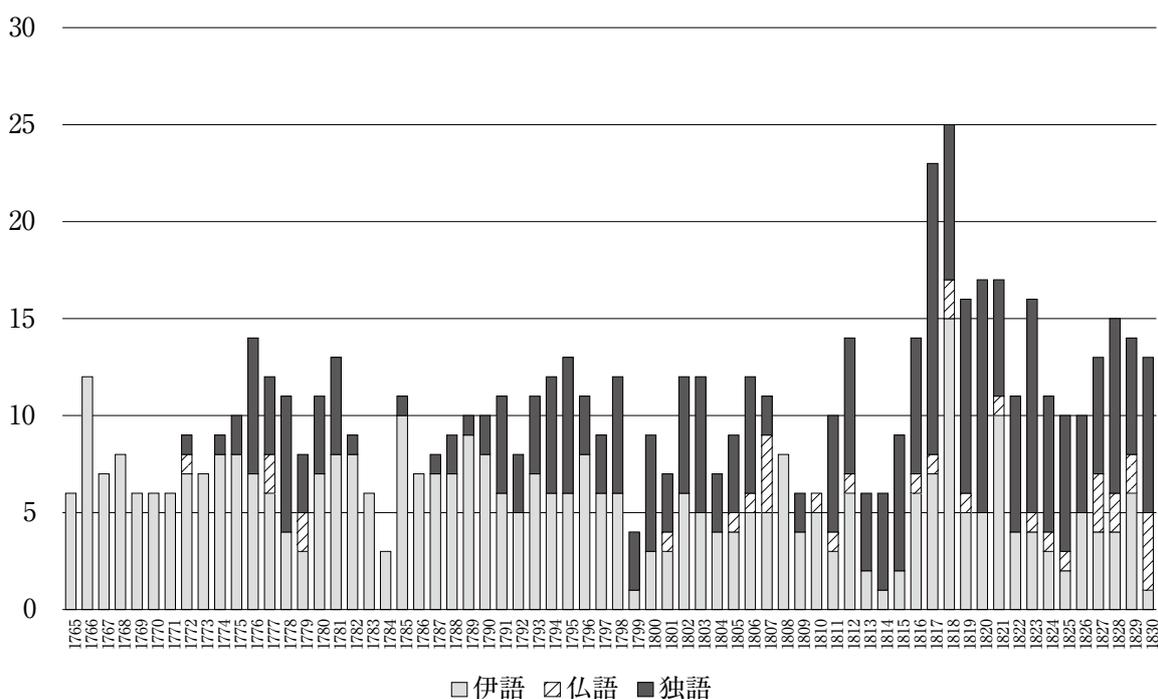


図2 ドレスデンのオペラ上演数 (1765~1830)

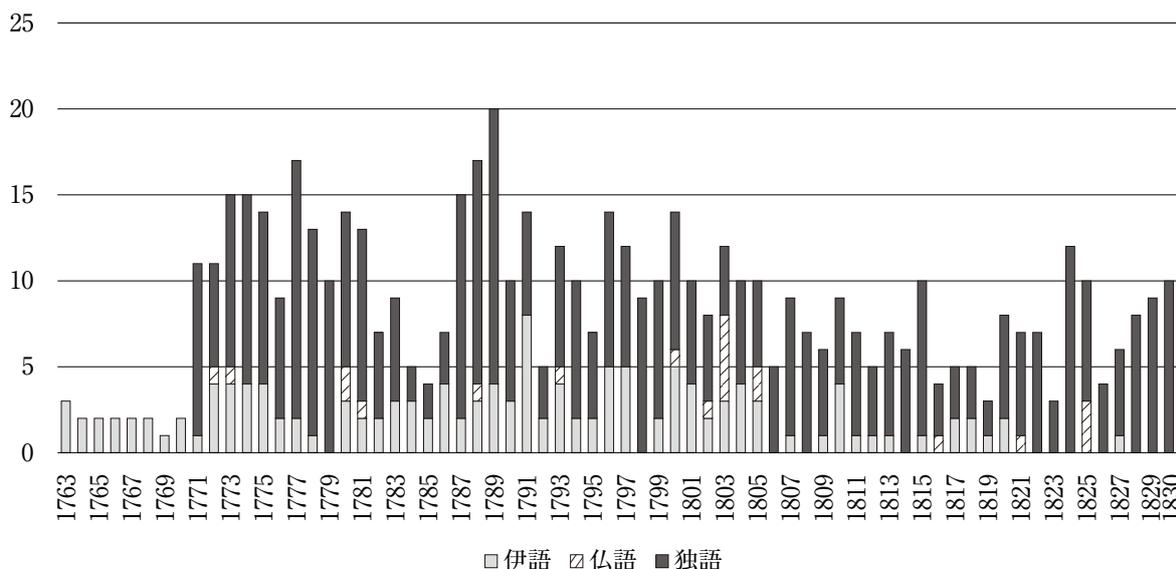


図3 ベルリンのオペラ上演数 (1763~1830)

ベルリンとヴィーンと比較してみると、上演作品数の違いはドレスデンと同じ傾向で、ベルリンでは平均5~10前後での推移であり、最大でも20作品となっている。上演言語の内訳の観点では、全体的な傾向として、イタリア・オペラの減り方がよく似ている。大きく異なるのは、ベルリンではヴィーンほどフランス語オペラが増えないことと、ドイツ語オペラの増加もヴィーンほど顕著ではない。ベルリンにおいては、宮廷関係の劇場ではイタリア・オペラ、ベーレン通りの劇場やジャンダルメンマルクトの国民劇場ではドイツ語オペラと棲み分けがおこなわれていた⁽¹⁴⁾。ヴィーンで、本拠地であるブルク劇場でドイツ語オペラの寡占状態になったのは、ドレスデン、ベルリンと比べて特殊な状況であることがわかる。

イタリア・オペラ上演のための人材という観点から見ると、ドレスデンでは1800年頃までは宮廷楽長がかならずイタリア・オペラを作曲しており、イタリア・オペラの新作が途切れることはなかったうえに、1817年のヴェーバーのドイツ・オペラ部門楽長就任以後もイタリア・オペラ部門も継続されるなど、イタリア・オペラ優遇は続いた。ベルリンでは、ドイツ・オペラの人気の高まりゆえにお荷物だったイタリア・オペラが併合される形で国民劇場と一体化するが、イタリア・オペラ側とドイツ・オペラ側両者に楽長や専業作曲家が置かれ、地元でオペラを育成する素地は残された。

5. まとめ

ヴィーン、ドレスデン、ベルリン三都市においては、七年戦争後オペラが再開する時期に相違が見られるが、さらに重要なのはその後の経過である。イタリアオペラの重要度はドレスデン、ベルリン、ヴィーンの順に低くなり、ドイツ語オペラ的重要度はその逆順となった。

ヴィーンでは、相対的にイタリアに近いこと、マリア・テレジアの父フランツ1世の時代にはトスカーナ大公を兼ねており、イタリアも領土の一部だったことなどから、ドレスデンやベルリンに比べると自前でイタリア・オペラを上演する体制を整備する必要に迫られていなかったとも考えられる。そこにヨーゼフ1世のドイツ化政策が追い打ちをかけた。また、マリア・テレジアの夫がフランス人であったことが、フランス・オペラの上演機会の多さの理由の1つとして挙げ

られ、ドゥラッツォがその後押しをした。

ヴィーン・ドレスデン・ベルリンの3つの都市で同じレパートリーが移動して上演されている例が多くみられることや、ドイツ語オペラと一口にいっても、最初からドイツ語で書かれたオペラだけでなく、フランス・オペラのドイツ語訳版も多く上演されたことなどから、パリも含めてこれらの都市での上演の実態の解明はまだ進めていく必要がある。それらについては今後の課題としたい。

《注》

- (1) 本研究はJSPS科研費JP16H06786、JP19K12984の助成を受けたものである。
- (2) バーニー 2020、145～247頁。
- (3) 渡辺 1991など。ミヒナーは1778～1792年、リヒトは1783～1792年、松田 2002ではそれまで1783年以降に絞っていたことを踏まえ、1778/79～1782/83年を扱っている。
- (4) 大津留ほか 2013、67～68頁。
- (5) 現在のブルク劇場は、1888年に現在の位置に新たに建設されたもので、当時のブルク劇場は残っていない。
- (6) ブラウン 1996、128頁。
- (7) マリア・テレジアはイタリア・オペラ派、夫のフランツ・シュテファンはフランス・オペラ派であった。
- (8) Die Oper in Italien und Deutschland zwischen 1770 und 1830.
<http://www.oper-um-1800.uni-mainz.de/> 2021年10月25日最終アクセス このデータベースは2019年頃から一時閉鎖されていたが、最近改訂された形でアップされた。データとしては変わらないが、データベースの仕組みが変えられ、検索の仕方や表示のされかたが以前とは異なるものになっている。
- (9) ボローニャ大学によるオペラ台本データベース Corago: Repertorio e archivio di libretti del melodramma italiano dal 1600 al 1900 (<http://corago.unibo.it/> 2021年10月25日最終アクセス)
- (10) Bauer 1955。
- (11) オペラの年間作品数を数える際には、劇場ごとであれば、オペラのシーズンを考慮し、そのシーズン毎に記すのが通例だが、今回はドレスデンとの比較のために1～12月で区切った。ドレスデンでは、いわゆるシーズン以外にもほぼ毎月のようにオペラが上演されており、シーズンで区切ることに意味がないからで、この方法はラントマンの方法に従った。
- (12) マリア・イザベラの誕生日は12月31日。また、台本にはミリャバッカによる改作が加えられている。この台本は <https://www.loc.gov/resource/musschatz.18247.0?st=gallery> 2021年10月25日最終アクセスで見ることができる。
- (13) 武石 36頁。
- (14) 大河内 46～49頁。

主要文献

- Bauer, Anton. *Opern und Operetten in Wien: Verzeichnis ihrer Erstaufführungen in der Zeit von 1629 bis zur Gegenwart*. Graz: H. Böhlaus Nachf., 1955
- Dietrich, Margret ed. *Festgabe zur 200-Jahr-Feier der Erhebung des Burgtheaters zum Nationaltheater*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1976
- Hadamowsky, Franz. *Wien: Theater Geschichte: von den Anfängen bis zum Ende des Ersten Weltkriegs*. Wien: Jugend und Volk, 1988
- Landmann, Ortrun. *Die Dresdener italienische Oper zwischen Hasse und Weber: ein Daten- und Quellenverzeichnis für die Jahre 1765-1817*. Dresden: Sächsische Landesbibliothek, 1976.
- Link, Dorothea. *The National Court Theatre in Mozart's Vienna: sources and documents, 1783-1792*. Oxford: Clarendon Press, 1998
- Michtner, Otto. *Das alte Burgtheater als Opernbühne: von der Einführung des deutschen Singspiels (1778) bis*

- zum Tod Kaiser Leopolds II. (1792)*. (Österreichische Akademie der Wissenschaften., Theatergeschichte Österreichs; Bd. 3. Wien; Heft 1) H. Böhlau Nachf, 1970
- 大河内文恵 「七年戦争後のベルリンで上演されたオペラ：ドレスデンとの比較から」、『オペラ／音楽劇研究の現在：創造と伝播のダイナミズム』、2021年、37～62頁
- 大津留厚 et al. 「ハプスブルク史研究入門：歴史のラビリンズへの招待」、京都：昭和堂、2013年
- 武石みどり 「18世紀ウィーンにおけるジングシュピールの発展過程：時期区分の試み」、『東京音楽大学研究紀要』11巻、1986年、26～44頁
- バーニー、チャールズ 「チャールズ・バーニー音楽見聞録」(Originally published as: *An eighteenth-century musical tour in Central Europe and the Netherlands: being Dr. Charles Burney's account of his musical experiences*, London 1959) 小宮正安訳、東京：春秋社、2020年
- ブラウン、ブルース・アラン 「マリア・テレージア時代のウィーン」、『啓蒙時代の都市と音楽』(西洋の音楽と社会6 古典派) 鍵山由美訳、東京：音楽之友社、1996年
- 松田聡 「18世紀後半のウィーン宮廷劇場におけるジングシュピール：1778/79～82/83における公演の性格の変化」、『大分大学教育福祉科学部研究紀要』第24巻1号、2002年、25～40頁
- ライス、ジョン・A. 「ヨーゼフ2世とレーオポルト2世時代のウィーン」樋口隆一訳、『啓蒙時代の都市と音楽』(西洋の音楽と社会6 古典派) 鍵山由美訳、東京：音楽之友社、1996年
- 渡辺裕 「モーツァルト時代の劇場力学：ブルク劇場の観客の分析」、『歴史の中のモーツァルト』 東京：岩波書店、1991年、95～125頁 (モーツァルト [2])